

# 金石範文学とその政治的背景

呉 恩 英\*

(e-mail : decency5@hanmail.net)

---

## 目 次

---

1. はじめに
  2. 日本共産党と在日朝鮮人との関わり
  3. 金石範の組織への思い
    - 3-1 「民族主義者」への憧憬
    - 3-2 祖国と組織への志向
    - 3-3 在日朝鮮人金石範の「親日」と「転向」への思い
    - 3-4 「実践」的政治活動から「文学」的政治活動への「転向」
  4. まとめ
- 
- 

## 1 はじめに

植民地期の厳しい検閲などを考えるならば、朝鮮人が朝鮮語であれ、日本語であれ、日本で朝鮮の実状についてもものを書くことは容易ではなかった。1920年代に入ってから日本におけるプロレタリア、共産主義者の影響を受け、朝鮮人がものを書く機会がより多くなった。この時期に朝鮮人が日本語で書いたものが、現在の在日朝鮮人文学の基盤になったといえるが、この在日朝鮮人文学成立期については現在も様々な議論がある。1945年以前の作家は留学生が多く、「日本軍国主義の御用作家」に変わったり、戦後朝鮮に帰った人たちが大部分だった。そのため、戦前のものを在日朝鮮人文学として扱うことは困難になっている。また戦後朝鮮人・台湾人などが「日本人」から外国人に逆戻りしたことを考えると、「在日朝鮮人文学」とは、戦後、日本で朝鮮人（韓国人）が日本語で

---

\* 名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 博士後期過程

書いた作品群であると定義づけるのが相応しいと考えられる。

いずれにしても、在日朝鮮人文学の成立とその背景について論じる際に、日本共産党の影響など、戦前戦後の日本の政治情勢の考察は欠かせないものであり、とりわけ金石範の文学を理解するには不可欠と言ってよい。それは金石範の大きなテーマの一つが四・三事件であり、彼がこの事件について深く考えるようになった背景と緊密に関係しているからである。金石範は共産党とその組織での体験がなければ、この事件にこれほど執着しなかったに違いない。

最近、在日朝鮮人についての研究が活発に行われるようになり、金石範文学についての論文も徐々に始まっている。しかし、上述したように、その先行研究は、ほとんどが『火山島』をはじめ、四・三事件と関連する作品をめぐっており、金石範が作品を書き始めた背景と文学という道を選んだ理由や経緯についてはあまり論じられていない。むしろ、金石範が作品を書くようになった動機としては、四・三事件による衝撃が大きい、組織での活動の体験があったからこそそれを本格的に作品化しようとする思いが強くなったと考えられる。組織で感じた絶望感、虚無感がその底にあるのである。とすれば、そのニヒリズムがどのような状況において、なぜ生じるようになったのかを理解するならば、金石範が作品で表現しようとするものの意味がもう少し明らかになるのではないか。したがって本稿では、作品を分析する前段階として、戦前戦後の日本におけるプロレタリア文学や日本の共産主義者と朝鮮人のかかわり、金石範が自ら体験した組織にどのような思いを抱いていたかを検討し、それを踏まえて金石範が文学への道を志すまでの背景を考察することにした。この作業は金石範の作品の理解のみならず、在日朝鮮人（文学）、ひいては朝鮮（韓国）と日本との関わりをよりよく理解することにも繋がるだろう。

## 2 日本共産党と在日朝鮮人との関わり

植民地期の日本では朝鮮人独自の文学組織は結成と同時に弾圧を受け、朝鮮人文学者の活動は大きな壁にぶつかった。これが日本プロレタリア文学運動との組織的な連携を確立させることになり、それによって朝鮮人文学は蘇生し、多くの可能性を見出すようになった<sup>1)</sup>。

1920年代には、鄭然圭の短編小説「血戦前夜」<sup>2)</sup>（『芸術戦線』<sup>3)</sup>、1922年6

1) 任展慧（1994年）『日本における朝鮮人の文学の歴史』法政大学出版局、165頁

2) 任展慧によると、この作品が「日本における朝鮮人が日本語によって書いた最初の短編小説であると思われる」という。

月、自然社)、金熙明の詩「幸ひ」(『文芸戦線』、1925年11月号)、韓植の短編小説「鉛売り」(『プロレタリア芸術』、1927年8月号)などの作品が発表されているが、これらの発表誌はいずれも日本プロレタリア文学運動と関わっていた<sup>4)</sup>。ここでは、この背景について検討したい。

戦前の日本においては、日清、日露戦争が続くなか、国内の経済状況は悪化の一途を辿っていた。その上、満州事変が起き、共産党は「日本帝国主義の戦争準備に対して闘争せよ」というスローガンを掲げて反戦闘争を行ない、労働者、農民の闘争をより強力に組織して発展させた。その行動綱領のなかには「朝鮮、台湾、満州その他中国から略奪した領土の解放、そこからの日本軍隊の即時撤退」という内容が含まれていた。そして例えば、赤旗の論説「朝鮮に於ける革命運動の発展とプロレタリアートの任務」(第九十一号、一九三二・八・二〇)では、「我々日本の共産主義者は凡ゆる手段と方法とを以て朝鮮の民族解放運動と労働者、農民の革命的民主的独裁樹立への為の階級闘争を援助する義務を負っている。而もかかる国際的義務の遂行において我々は尚甚しく不十分である。我々は今こそ精力的に日本の労働者、農民の間に朝鮮の完全なる分離(独立)の思想を宣伝し、他民族を抑圧するプロレタリアートは自分自身をも解放し得ないことを説明しなければならぬ」と朝鮮に対しても積極的な意思を表明していた<sup>5)</sup>。

このように日本においてはロシア革命の影響によってプロレタリア、共産主義による運動が盛んになっていたが、朝鮮においてもロシア革命の影響を受け、独立運動などが活発になっていた。留学生たちも、日本において共産主義による植民地民族の解放理論やプロレタリア文学を研究し、プロレタリア演劇を通じて朝鮮民衆に民族主義、共産主義思想の啓蒙活動<sup>6)</sup>を行っていた。プロレタリア芸術運動を通して闘争を展開することにより日本人と朝鮮人が互いに支援し、支援されていたことがわかる。

日本プロレタリア文化連盟(コップ、1931年)の綱領のなかにも「植民地属領における帝国主義の文化支配反対、民族文化の自由」が掲げられ<sup>7)</sup>、朝鮮についての関心が

3) 『芸術戦線』は、第二次共産党事件の一斉検挙にあった「老革命家堺利彦氏の労に酬」いるために、青野季吉、藤井真澄、前田河広一郎、中西伊之助、尾崎士郎の5人が発起人となって編んだ詩・小説・評論集である。(任展慧、前掲書、165頁)

4) 任展慧(1994年)、前掲書、177頁

社会主義的な評論を多く掲げた日本の総合雑誌である『改造』に、1932年張赫宙の「飢餓道」が懸賞小説に入選したことも、当時の社会的な影響があったからだと考えられる。

5) 朴慶植(1979年)『在日朝鮮人運動史』三一書房、227~228頁

6) 朴慶植(1979年)、前掲書、321頁

7) 朴慶植(1979年)、前掲書、274~275頁

存在したことがうかがえる。この時期（1931年）にコミンテルンの方針にしたがって朝鮮共産党日本総局は解体し、日本共産党の一部として活動するようになる。帝国主義への反対と労働者階級の闘争という同じ目標もあったが、日本人があまり考えていなかった朝鮮人に対しての民族的抑圧と差別という問題については闘争方針の対立もあった。このような共産党を中心とする日本人と朝鮮人との関わりは戦後1950年前半まで続いていた。

### 3 金石範の組織への思い

上述した戦前の状況を踏まえて、戦後については金石範が組織に関与するようになる過程に焦点を当てながら考察してみたい。

#### 3-1 「民族主義者」への憧憬

金石範の年譜<sup>8)</sup>によると、済州島出身の母は彼を身ごもってから日本へ渡り、三、四ヶ月後に大阪で金石範を生んだ（1925年10月）という。母は、朝鮮服の裁縫と、小さな平家で数人の同胞下宿人を置いて生計を立てた。その下宿屋には朝鮮人や日本人の労働運動家たちが頻繁に出入りし、彼女は裕福ではない生活の中からもできるかぎり物心両面の援助をしたため別名、「渡政オモニ」（朝鮮の「渡辺の母さん」）<sup>9)</sup>と呼ばれたほどであるという。といっても母は政治に詳しい人ではない。ただ「主義者」「思想家」に尊敬の念をもっていた人であった。

金石範の兄は、全協（日本全国労働組合協議会）に所属し、生野に多かったゴム工場に働きながら、労働運動に走り回っていた。ある日、金石範（五、六歳のころ（1930年、1931年））は、寝込みの兄を私服たちが襲ったのを目撃したことがある。兄は、警察にぶちこまれては「母を嘆かせ、刑事といえば、それに対する憎悪から、母を身震いさせた」<sup>10)</sup>という。このような母と兄の影響は、幼い金石範に無意識に自分も何かしなければならぬと感じさせたと思われる。

金石範は、幼少時済州島との間を何度か往復していたが、それは記憶になく<sup>11)</sup>、1939年（14歳）に数ヶ月を過ごしたことが済州島に対する最初の思い出だという。この時か

8) 金石範（2005年）『金石範作品集Ⅱ』平凡社

9) 「朝鮮の「渡辺の母さん」、台湾で、日本の官憲に射殺された日本共産党の指導者・渡辺正之輔氏の母堂が、その子息や同志のため献身的につくたということにちなんでおそらく愛敬のつもりもあって、そう別名をつけたものと思われる」（金石範『ことばの呪縛』、34頁）

10) 金石範（1972年）『ことばの呪縛』筑摩書房、33～34頁

ら、濟州島が故郷だという意識が強くなり、次第に反日思想が濃厚となる。だが、金石範の民族意識が強くなったのは、日本での生活と物心ついてから見た濟州島の風景との極めて大きな差異から生じたものである。

このとき私の心にはじめて、故郷がベールを脱ぎ実体として現われた。その雄大な自然は私なる少年の魂を圧倒した。漢拏山が、異郷で母や故郷の人びとが神を語る如くにして語った漢拏山が、私を根底からゆさぶり動かしたのである。故郷の色は、海も山も森も、絵具のように鮮やかであった。故郷の寡黙でたくましい人間を含めてこの自然は、それからの私の人生に、決定的な影響を与えずにはおかないほど強烈だった。こうして私は故郷をとり戻し、祖国をとり戻そうとし、やがて小さい民族主義者になっていった。<sup>12)</sup>

上の引用文から推測するならば、金石範が濟州島で見たのは、日本で母と兄が関わっているような労働運動や、貧困な生活ではなく、濟州島の美しい風景であった。そこに金石範は感銘を受けたが、日本に帰ると、もとの生活に戻らなければならないのが現実であった。濟州島はいわば彼のユートピア（理想郷）となった。しかし、実際の生活の場である日本はそうではなかった。こうして、金石範にとって濟州島は反日思想を、「小さい民族主義」への思いを持たせてくれた場所として記憶され意識されるようになった。

### 3-2 祖国と組織への志向

金石範は、母と兄の影響もあり、少しずつ民族主義に目覚めていく。1943年（18歳）秋から1944年夏まで、濟州島で朝鮮語の勉強をし、観音寺で朝鮮の独立について人々と語り合う体験もした。金石範は、この時期の「短波無線聴取事件（清津短波事件、11月）」<sup>13)</sup>のことを語り、もう少し遅く大阪へ戻ったら自分も逮捕されていただろうと、当時の危機的状況を伝えている。

1945年3月（20歳）、中国への脱出を考え徴兵検査を口実にソウルへ渡り、4月初め、濟州島で徴兵検査を受ける。五月、発疹チブスで一ヵ月近く入院し、退院後江原道で療養する。禅学院で李錫玖（建国同盟幹部）、張龍錫と会う。李錫玖によって中国脱出が空想にすぎないことを知り、日本に戻ろうとするが、李錫玖に反対される。反対を振り切って7月ごろに日本へ戻る。この時期のことは、『1945年夏』<sup>14)</sup>にうかがえるが、主

11) 金石範（1972年）、前掲書、35頁

12) 金石範（1972年）、前掲書、35頁

13) 濟州島滞在中に、深夜濟州無線電信局で、朝鮮独立を訴えるサンフランシスコ放送を一緒に傍受した人々が清津で逮捕されたことである。（『金石範作品集Ⅱ』、604～605頁）

人公金泰造が解放後、祖国建設のために再び日本から朝鮮に渡る希望を表わして物語は終る。ここで金石範が中国脱出を考えたのは、日本からも朝鮮からも離れたくないという心理もあったのではないかと思われる。ともかく、金石範は中国へ脱出することもできず、日本で祖国の独立を迎えることになった悔しさから虚無的になり、それを挽回するため、その年11月に新生祖国建設に参加すべく今度こそ日本から引揚げる決心でソウルへ渡る。ソウルで再び李錫玖、張龍錫らに会うが、この時、彼らが独立運動の闘士であることを知る。張龍錫がいる南山の麓の旧社宅で、学生たち、労働組合幹部青年と共同生活を始める。

当時（1946年）、米ソによる朝鮮の信託統治案をめぐる賛否両論があったが、金石範は朝鮮共産党・朝鮮人民党などの信託統治反対デモ（党はのちに賛成に変る）に参加していた。それにもかかわらず彼は日本に戻ったのである。一ヶ月の予定の日本への密航というが、彼はそのまま日本に定住してしまった。

金石範が、張龍錫から、「なぜ君はわれわれが待っている祖国へ帰らぬのかという手紙」<sup>15)</sup>をもらっていながらも帰らなかったのはなぜか。年譜によれば、「前年夏にソウルにとどまっているか、大阪から予定どおり再びソウルへ帰っていたら、同年輩の彼らとともに二〇代前半で世を去っていただろう」<sup>16)</sup>と金石範は語っている。これは当時の朝鮮の情勢が極めて厳しかったことをうかがわせるが、その厳しい状況から金石範は逃げ出して日本に渡ったとも考えられる。このような状況は『火山島』をはじめ、彼の作品の中で、組織に関わる登場人物が葛藤する心理描写に表われている。

その後、幼い頃から見えてきた母と兄の行動、そして朝鮮共産党などの影響であろうか、「芸術の“永遠性”“普遍性”を否定するマルクス主義の芸術イデオロギー論に疑問」をもち、京都大学文学部美学科に入学（1948年）するが、ほとんど大学に出なかった。この年に在日朝鮮人学生同盟関西本部（大阪）の仕事に携わり、日本共産党に入党する。ここでまた、なぜ金石範は日本共産党に入党したのかという疑問が起こる。在日朝鮮人のなかにもいくつかの組織<sup>17)</sup>があったにもかかわらず、金石範は日本共産党に入ったの

14) 「長靴」（『世界』1971年4月号）、「故郷」（『人間として』1971年8号）、「彷徨」（『人間として』1972年11号）、「出発」（『文芸展望』1973年2号）を一冊でまとめて筑摩書房より1974年刊行。

15) 張龍錫からの手紙は1949年5月5日付が最後。

16) 金石範（2005年）、前掲書、606頁

17) ・在日朝鮮人連盟（朝連、1945年10月）⇒朝連の後継団体、在日朝鮮統一民主戦線（民戦、1951年1月）⇒在日朝鮮人総連合会（朝鮮総連、1955年5月）

・朝鮮建国促進青年同盟（建青、1945年）

・新朝鮮建設同盟（建同、1946年）⇒建青その他の団体を合併した在日朝鮮居留民団（民団、1946年）⇒在日本大韓民国居留民団（韓国民団、1948年）と改称。

である。

戦後、朝連は日本共産党（日共）の指導のもとに日本の民主革命をめざし、その「前衛的実力行動部隊」として活動した。朝鮮人共産党員は朝連の各級組織のなかで、党フラクション（のちグループ）活動を行い党の方針を伝達、浸透させた。そして1946年8月、日共第四回拡大中央委員会では朝鮮人問題が討議され、いわゆる「八月方針」が決定される。この方針によれば、朝鮮人だけのフラクションは日本人党員とともに活動する。また朝連はなるべく下部組織の露骨な民族的偏見を抑制し、日本の人民民主革命をめざす共同闘争の一環として、その民族的な闘争方向を打出すことが必要であり、その方が朝鮮人自体のためにも有利である。そしてあくまでも日本の人民民主主義戦線の一翼を担う役割を果たす<sup>18)</sup>ことを求めている。要するに金石範は、日本共産党が在日朝鮮人運動を完全に日本共産党の指導のもとにおき、日本の民主革命に従属させた時期だったので、日本共産党に入党したとも考えられる。だが、「八月方針」が、朝鮮人の民族的主体性を抑制していることなどを理由に総連は日共と疎遠になった。

1951年1月、在日本朝鮮人連盟（朝連）の後継団体である在日朝鮮統一民主戦線（民戦）が結成され、金石範は4月から民戦の傘下にある大阪朝鮮青年高等学院で仕事をすが、まもなく学校がつぶれてしまう。

翌年、日本共産党から離党し、内密に仙台へ行って、ある組織の仕事をすが、極度の神経症に罹って仕事に耐えられず、三、四ヵ月でやめて東京へ出る。この時の心境を、後に金石範は「組織活動をしていれば愛国者といわれた時代に、ふたつの組織を脱退するということは、政治生命が切れることを意味」<sup>19)</sup>し、絶望的な気持ちであったと述べた。この心境は彼の作品にも表われているが、果たして彼が言う「政治生命」とは何であろうか。彼は「政治」という場に関わっているだけで何らかの運動をしているという錯覚を持ったに過ぎないのではないか。もちろん当時の状況が厳しかったことは誰でも認めるだろうが、他者に対して何らかの運動に関わっていると見せられる場所、換言すれば、彼にとっての逃げ場を失ったとも言えるのではないか。

戦前から、念願の祖国独立のために中国脱出を思い、戦後日本共産党などの組織においてもとり立てて活動することはなく、組織に関わったとしても絶えず、やめることになる。1960年に再び大阪朝鮮高校の教師として朝鮮総連と関わりながら執筆活動が続けるが、1968年には「組織」から完全に離れた。

結局、金石範が考える祖国と組織は単に憧れのみであり、観念的なものであったように

18) 朴慶植 (1989年) 『解放後 在日朝鮮人運動史』三一書房、91頁

・朝鮮人の日本共産党員—1946年2月には約千人、1948年8月には約3千7百人。

19) 金石範 (2005年)、前掲書、607頁

思われる。このような思いの為だろうか、長編『火山島』をはじめ彼の作品では、主人公が組織に属する者の一人として葛藤する心理描写がかなり頻繁に表われている。

### 3-3 在日朝鮮人金石範の「親日」と「転向」への思い

金石範は、家庭環境や日本・朝鮮における政治情勢の影響によって民族主義者になろうとしていた。しかし祖国独立のために朝鮮に渡ったり組織活動に加わったりしても、金石範はその意志を実現することができなかった。上述したように金石範が活動するための条件はほとんど揃っていたとも言え、金石範自身がもう少し強い意志をもって活動したならば、独立運動の参加も中国脱出もできたように見える。結局、それができずに金石範は日本に止まることになった。

つねに日本から飛び去ろうともがきながら、私はまた逆戻りをし、一九四五年八月十五日を東京で迎えることになる。このように、結局は日本に残って在日朝鮮人の一人になり、そうでありながら、心はいつも飛翔しようとする。——個々の人びとの歩んできた道はちがうにしても、これはほとんどの在日朝鮮人の心情ではあるまいかと私は思う。<sup>20)</sup>

なんとなく帰れなくなった（笑）。やっぱりこっちが良かったんじゃないかな。四六年になると、ソウルは物価が高騰するし、失業、乞食、飢えの街になって暮らせなかった。ただ問題なのは、私がソウルからこっちに来なかったらね、今の私の存在はないですよ。一緒に死ぬんじゃないかな。<sup>21)</sup>

上の引用文のように金石範はなぜ日本に止まることにしたのかを明確にしていない。その反面、当時の状況が危険を感じさせるものだったことは繰り返して述べている。金石範は朝鮮人でありながらも、自分の意志で日本に渡ったのではなく、日本に生まれ育った二世世代に特有の感覚から、母のように闘争する人たちを自然に助けることが出来ず、また兄のように体を張って労働運動に励む勇気もなかったと思われる。

金石範は小説や評論集にもこのような思いを綴っているが、在日朝鮮人、親日派、転向などについてもしばしば熱く語っている。また、北朝鮮についてはほとんど語ることがない反面、韓国を批判することは多い。ここには四・三事件が大きく作用していると思われるが、彼の作品には「親日」、「転向」についての言及が絶えず繰り返されている。

「親日」行為においてはその言をどのように繕うおとも、そして植民地社会で優者の位

20) 金石範 (1972年) 『ことばの呪縛』筑摩書房、38頁

21) 金石範・金時鐘 (2002年) 『なぜ書きつけてきたかなぜ沈黙してきたか』平凡社、40頁

置に立ちながらも民族的、倫理的負目から逃れ得なかったが、現在はその“民族”がひいては“祖国統一”が支持体制と等価になり、代替物となる。北朝鮮の絶対的価値基準の崩壊による思想的責任の、その拘束の解除、“良心”の呵責を負わなくてすむような状況が出来上がり、そして在日朝鮮人の転向の（転向なのか何なのか自分でもはっきりしないような）一つのパターンと、道が開かれる。これは日本の戦後転向にも似ていて、いわばなし崩しの無原則、曖昧模糊、一種の日常性の様相を呈して当りまえの風潮となっている。22)

「親日」については批判的な視点から、北朝鮮については判断放棄の状態で、「転向」については曖昧な観点から語っている。これは、彼の作品にも表われていることである23)。金石範はまた、北朝鮮の場合には、親日派に対する処分が行われたのに比して、韓国ではそれが行われないうまま現在に至り、その上、反共意識によって国家が成り立っていることについて一層批判的に語ろうとしている。これ一つだけをとっても、北朝鮮は批判の対象にならないのである。では、なぜこのように「親日」と「転向」にこだわるのか。それはまず上で言及したように金石範が日本共産党と組織に参加していたことから生じたこだわりのように思われる。

戦前日本における転向について語った福永操によると、「転向」の本来の意味は「治安維持法第一条一項の「国体の変革」すなわち当時の日本共産党綱領でいえば「君主制廃止」（天皇制打倒）の要求を、固持するか、否認するか」24)が主眼となっているという。この定義に従えば、金石範の場合は、反天皇制を語り続けているので、転向していないといえる。しかし、また福永操の文を借りると、「共産党員も人間であるから誰だって弱さをもっている。逮捕された党員が、本人自身の事情や家族事情その他の個人的な弱みになやんで意気阻喪して、当局にたいして、自分はもう共産主義運動をやる気がなくなつたと言って脱党を表明して、運動から全く離れて」しまう場合もあり、これらの「本来の意味での思想問題とは無関係に党から離れた人たちは「脱落者」あるいは「没落」として、転向とははっきり区別される。金石範の作品「往生異聞」25)の黄泰寿は、獄から出所するためには転向しなければならなかった状況で、周りの人から認められた転向、すなわ

22) 金石範 (1993年) 『転向と親日派』岩波書店、4~5頁

23) 金鶴童が指摘したように、『火山島』の李芳根が四・三蜂起に対する支援は、共産革命を夢見る人たちが犯している思想的な誤謬り、祖国を売り込んだ親日派たちが解放された祖国をふたたび蹂躪している現象に憤怒と敵愾心がより大きく表われている。(『在日朝鮮人文学と民族』国学資料院、2009年、230頁)

24) 福永操 (1978年) 『共産党員の転向と天皇制』三一書房、10頁

25) 「往生異聞」『すばる』1979年8月号に発表。

ち偽装転向するが、現実にはそれは成り立たないことであった。この状況におかれた黄泰寿は、実は「脱落者」あるいは「没落」者と言えるのである。このように転向をめぐる曖昧な言説は、彼の他の作品にも表われている。

他方、当時の日本では、検挙された党员や党支持者の全体に対して、思想的に転向を表明することを求めていたので、この場合は、脱落と思想上の転向との区別はつけにくくなる。

金石範自らは日共・総連にかかわりそこから離れたことを転向と思っているが、彼の組織に関する活動歴から見ると、果たして転向と言えるのだろうか。むしろ脱落者に近いと考えられる。つまり金石範自身においても転向という言葉の意味が曖昧化されている。

上述したように、在日朝鮮人は戦後も続いて日本共産党の指導のもとに活動し、それを離れても同じような共産主義の総連組織をもっていた。総連は1955年からは北朝鮮の指導下に置かれた。このように北朝鮮の情勢によって総連が変りつつあるなか、共産党、総連に携わっていた金石範は組織から疎遠になっていく。といっても彼の反天皇制、親日派などに対する考え方は戦前戦後の共産主義が基盤になっていることは否定できないだろう。このように金石範の作品は転向、反天皇制、親日派などの言葉と切り離して考えることができない。

### 3-4 「実践」的政治活動から「文学」的政治活動への「転向」

金石範は上記のように常に活動家、革命家になることを目指し、絶えず挫折し、結局諦めて文学への「転向」を志すようになる。なぜ彼は活動を放棄し、文学を選んだのだろうか。その点を彼の作品の全体的な流れを通して考察してみたい。

彼は、1951年に朴槿というペンネームで「一九四九年頃の日誌より——「死の山」の一節より」という最初の作品を『朝鮮評論』（創刊号）に掲載したが、すでにこの時期からモノを書きたいという思いが生じていたと考えられる。この作品は、宋恵媛<sup>26)</sup>が述べたように、在日朝鮮人の「私」の傍観者的な視点から事件が淡々と描かれている。1952年には、仙台で短い期間であるが、秘密機関の組織に参加する。それが「鴉の死」<sup>27)</sup>を書く契機になった。この「鴉の死」は、四・三事件そのものの記述より組織に対して葛藤する登場人物の心理描写の比重が大きいと言えるが、本来は組織そのものについて書こうとしたにもかかわらず、そうすることが出来なかったのではないかと思われる。

彼は組織に関わりながら、幾つかの作品を発表したが、組織そのものについての物語は

26) 宋恵媛 (2005年) 「一九四九年頃の日誌より——「死の山」の一節より」について 『金石範作品集 I』 平凡社、561頁

27) 「鴉の死」『文芸首都』1957年12月号に発表。

書いていない。1968年になって、完全に組織を離れた後しばらく時間が経ってから、「途上」（1974年）、「驟雨」（1975年）、「往生異聞」（1979年）、「炸裂する闇」（1993年）など、ようやくそこから抜け出したというように、在日朝鮮人の悩みや葛藤とともに<sup>28)</sup>、組織に対する批判的な視点をもった作品を書き始める。そして本格的に四・三事件をテーマとした長編『火山島』に取り組み連載を開始したのである。金石範の作品においては全般的に、強い革命への意識と、「裏切り」「脱落」「逃避」が常に対立する形で物語が形成されている。そこに、在日朝鮮人として彼が自責するすべての問題から自由になりたいという思いがあったといっても過言ではない。すなわち、この『火山島』こそ、金石範が抱いていたすべての葛藤を物語る総体的な場<sup>29)</sup>なのである。ところが、この作品は四・三事件をテーマにした代表作ともいわれているが、その内容は事件よりむしろ組織についての登場人物の心理描写に焦点が当てられる傾向が多少ある。それがまた長編『火山島』の全体を貫く基軸となっているともいえるだろう。それほど金石範において組織への思いは複雑で大きいと考えられる。

組織を離れ本格的に組織に関するものを書いたのが「途上」<sup>30)</sup>である。この作品は、祖国の完全なる統一独立をはかるための在日朝鮮統一民主戦線が、朝鮮民主主義人民共和国と結びつき、その過程で腐敗していく権力者幹部たちを批判している。組織の権力者グループは、共産主義の大義名分をかかげて、「在日朝鮮人大衆の素朴な愛国心の上に胡坐」をかき、「組織における同志相互間の不信をつくり上げて」、もっとも重要な人間関係を破壊していた。組織員である馬達夫は、「自分を単なる物書きにすぎない」と思っていながらも、「組織の存在を否定するのではない以上、組織への関心を捨てることができない」のである。

「なんで、組織を誹謗するような文章を書かねばならんのだ？」

「（省略）おれは誹謗はしていない、組織のどうともならぬ体質に対する批判をしているだけだ……（省略）」（「途上」、21頁）

28) 「虚夢譚」（『世界』1969年8月号に発表）には、日本に同化している自分を責めるような物語を、『1945年夏』（1971～1973年）では、戦前と戦後直後において一人の朝鮮青年が民族運動や中国脱出、そして新生祖国建設を求め、朝鮮に渡る物語を描いている。

29) 中村福治が述べているように金石範の作品は、済州島四・三事件に対する執着による創作のため在日朝鮮人文学の中でも朝鮮的なイメージが強く表われているといえる。（中村福治（2000年12月）「在日朝鮮人文学における金石範文学の位置」『龍鳳論叢』全南大学校人文科学研究所、97頁）

30) 「途上」『海』1974年5月号に発表。

上記の引用文は、組織の「誹謗」か、「批判」か、をめぐって河奉吉と馬達夫が対立する場面である。馬達夫は、組織の存在を認めている。しかし、組織が官僚化し、無条件に服従を強いて非人間化することなどにはついていけない。そしてそのことを批判したのだが、組織内の人たちはそれを認めてくれず、彼の「批判」は「誹謗」と見なされる。彼は、そのような組織に同化しようとしても同化しきれないことに苦しんでいるのである。組織に対する悩みと批判的な視点は「往生異聞」<sup>31)</sup>にも現われている。この作品では、組織内の生活に馴染めない一人の組織員が中心に据えられ、獄中転向をした黄太寿が、権威主義に陥っている組織幹部の官僚化の問題を批判的に語る。

しかし、上の作品を見ても具体的になぜ組織の中で絶望を感じていたかについては語られていない。むしろ、期待していた組織に入ってみたところ、実際は自分たちの活動する場ではなかったという幻滅はあるにしても、作品の中での登場人物の葛藤は大きすぎる。この疑問点に答えるように、金石範は1993年になって『すばる』9月号に「炸裂する闇」を発表したが、これは上の作品とは時期的にかなり離れている。

金石範の個人史を基にして作品の扱う内容に順序をつけるならば、『1945年』の次が「炸裂する闇」であろう。それほど、彼自身が逃げ続けてきた「気持ち」の問題を明らかにすることは難しかったと考えられる。この作品には、組織の中で葛藤している登場人物の心理描写、すなわち組織を離れた理由が以前の作品より詳しく書かれている。日本共産党に入り、S市の秘密組織に入るために脱党したこと、そしてその後秘密組織から離れた過程が描かれている。

「炸裂する闇」の「私」は三、四年まえに済州島四・三事件に大きなショックを受け、機関誌の創刊号に小説風のを載せており、続けて書きたいと思っていた。その時、蔣基天からS市に行けば、一定の仕事しながらモノを書く時間もできるだろうと誘われた。当時は、「日共中央指導部の分裂、分派闘争の激化、極左冒険主義的路線、同志間の疑心暗鬼、不信が末端活動家にまで及び、在日朝鮮人運動も非合法の反米反李祖国国防衛闘争を行っていて、組織が統一的な態勢を保つことができずに混乱していた」<sup>32)</sup>時期だった。それでも脱党は、「反革命的逃亡」、「裏切り行為」であり、「革命を指導する者にとっては耐えがたい汚辱にまみれた脱落者」と見られる時代だったため「私」は悩んだ。当時は、日本共産党の日本入党員にとっても転向は裏切り行為と思われた時期であった。そのような状況の雰囲気「私」も一人の党員として感じたのである。

しかし、日共を脱党後も「祖国の党に直結している地下組織に参加」し、「革命戦線に繋がるのに自負と、そしていささかのヒロイズムさえ私はおぼえていた」。それは「党を離

31) 「往生異聞」『すばる』1979年8月号に発表。

32) 金石範(2005年)『金石範作品集I』平凡社、441頁

れた者の逃げ道」でもあった。だが、「私」はS市に行って失望することになる。「私」に与えられたのは、地方新聞社の広告部員、広告取りだった。「もともと恥ずかしがりやで人見知りする性」の「私」には、その仕事は合わなかったのである。

広告取りだけが、「神の国」をひろめるのに繋がるものではないのだと思いながらも、これは与えられた「革命的家業」を果し得ぬ自分の弱さに対する「逃げ」、合理化であり、原則的な革命精神、鋼鉄の革命的意志、革命的楽天主義の欠如なのである。（「炸裂する闇」、449頁）

「私」は、広告部員は革命に対する思想の欠如であり、「あまり品がよくない」仕事だと自分の弱さ、自己合理化を認識している。しかし、このように考える「私」には、「組織」を否定し離れる勇気も認められない。

このように金石範は在日朝鮮人として、一人の組織員として、モノを書いており、そこには虚構も存在しているが、作品から作家の考え方、内面の多くを窺い知ることができる。すなわち、これらを通して金石範自身と彼の作品とを照らし合わせてみるができるだろう。

金石範は、1925年生まれであるにもかかわらず、在日朝鮮人二世である。日本で生まれ育ったため、一世より祖国への思いは明確ではない。しかし、植民地期と戦後の環境において祖国への思いを言明せずにいることは許されなかったのだろう。祖国を解放する運動を夢見、朝鮮に渡ってみると、自分が朝鮮人か日本人か分からなくなり、一つの現実回避の可能性だった中国への脱出も諦め、日本に戻ってくる。しかし、まもなく戦争が終わり、もう一度祖国建設のため朝鮮に渡るが、再び日本に戻ってきってしまう。当時の在日朝鮮人の間には、愛国者であれば組織に参加すべきだという雰囲気もあった。祖国から戻った後ろめたさから生じた虚無的な気持ちから、彼は少しためらいながらも組織に入る。しかし、組織は彼自身が考えたものとは違い、次第に伏魔殿に変わって行くのである。彼はこのような組織の実状を否定することもできず、組織を離れることもできない。そして屁理屈を考えながらも、政治生命を繋ぎとめようとするが、結局、組織から距離をとるようになる。

といっても、彼は政治生命を断とうとはしない。それを繋ぐのがモノを書くことである。1951年から作品を書き始め、在日朝鮮人機関誌にも携わったことがある。ここから金石範が組織活動よりモノを書くことに愛着を抱いていたことが分かる。彼は上述したように消極的な理由から組織活動を求めている。つまり、モノを書く仕事に携わっていたからこそ、組織に属することができたのではないか。しかし、組織に属したまま、モノを書くことはあまりにも制限があったため、結局組織を離れるしかなかった。つまり、組織に属しての政治活動から本格的な文学活動に「転向」したと言える。作品に表われているように、彼が組織と関わる体験を持たなかったら、代表作と呼ばれる『火山島』も生れなかったかもしれない。

植民地を経験した作家、金石範と金達寿はある短い対談において、生活の中に政治が

しみこんでいるように、政治が生活感覚になっている<sup>33)</sup>と語ったことがある。それほどに、在日朝鮮人にとって政治は切り離そうとしても切り離せない生存に関わる問題であり、アイデンティティーそのものの問題だったことも見逃せない。

椎名麟三は、金達寿の『玄海灘』について「文学はいつも被圧迫者の味方」であると語り、このような諸現実描写こそ、「性格によってきまるのではなく、おかれた場所とそれに対するたたかいによってきまるから」<sup>34)</sup>と述べた。この言葉を借りるなら、金石範の文学は、彼がおかれた場所、状況とそれに対するたたかいから生まれたその実りだともいえるだろう。

## 4 まとめ

在日朝鮮人文学は戦前戦後の日本の情勢と深く関わっていることはいうまでもない。その中で共産党との関わりは金石範（作品）を論じる際に欠かせないものである。そしてそれは、とくに金石範が第二の故郷であるという済州島で起った四・三事件とも繋がっている。この事件は、共産党をはじめ、彼が革命家になろうとしたがなれなかったこと、それについての悩み、葛藤など、様々な要素と絡み合い、それらすべてが『火山島』という作品に集約されたと言っても過言ではない。そしてそれらは在日朝鮮人の抱える問題と深く関わっており、日韓関係、ひいてはアメリカなど、国際政治的要素も関係していると思われる。

金石範が『火山島』（四・三事件をテーマにした作品群）を書き上げることができたのは、自身の体験した組織活動をその基盤としたからである。金石範は在日朝鮮人として、共産党及び組織との関わりを繰り返し期待しながら活動していた。しかし、加入した組織はそのつど伏魔殿のように変容した。このような組織に対し、そして自分の目指した組織活動が上手く成しとげられないことに対し、彼は絶望感、虚無感を感じた。彼はどうにかして政治的かわりを保ち続けようとしたが、結局組織を離れることになる。

植民地を経験した在日朝鮮人にとって政治は生存に関わる問題になるほど、生活の中に政治が込み込んでいた。また植民地と戦後の時代状況において、祖国への思いを言明せずにいることは許されなかったことを考えると、金石範のような二世にとっては、政治活動への思いはより複雑なものであっただろう。祖国への明確にしがたい思いであっても、それは心の底から湧き出したものであることも否定できない。これが彼の組織活動にも影響を与えたと考え

33) 金達寿・金石範（1964年10月10日号）「〈対談〉文学と政治」『朝日ジャーナル』、39頁

34) 金達寿（1954年6月号）「文学と政治についての感想」『日本文学』、10頁

椎名麟三の新日本文学会東京支部ニュースというガリ版刷りのものについた「金達寿『玄海灘』について」という書評を金達寿が読んだ感想。

られる。

金石範はヒロイズムの姿勢を表に出そうとしながら、実際に行動することはできず、むしろそこから逃げ続けた。唯一彼が逃げようとしなかったのは、「ものを書く」ことであった。換言すれば、彼は体を張って行う「実践」的政治活動からモノを書く「文学」的的政治活動に「転向」したと言えるだろう。金石範は自身の体に沁み込んだ「政治的なもの」を「文学」を通して表現しようとしたのである。

以上、戦前戦後の日本におけるプロレタリア文学や日本共産主義者と朝鮮人のかかわりを検討し、それをふまえて金石範が文学への道を選ぶまでの背景について考察した。これらの背景が彼の作品にどのように反映され描かれているか、という文学にとってより本質的な問題の分析は今後の課題にしたい。

## 【参考文献】

〈韓国〉

김학동 (2009년) 『재일조선인문학과 민족』 국학자료원  
 나카무라후쿠지 (中村福治) (2000년12월) 「김석범 문학이 재일조선인 문학에서 차지하는 위치」 『龍鳳論叢』 전남대학교 인문과학연구소

〈日本〉

任展慧 (1994年) 『日本における朝鮮人の文学の歴史』 法政大学出版局  
 金石範 (2005年) 『金石範作品集Ⅰ』 平凡社  
 金石範 (2005年) 『金石範作品集Ⅱ』 平凡社  
 金石範 (1972年) 『ことばの呪縛』 筑摩書房  
 金石範・金時鐘 (2002年) 『なぜ書きつづけてきたかなぜ沈黙してきたか』 平凡社  
 金石範 (1993年) 『転向と親日派』 岩波書店  
 朴慶植 (1979年) 『在日朝鮮人運動史』 三一書房  
 朴慶植 (1989年) 『解放後 在日朝鮮人運動史』 三一書房  
 福永操 (1978年) 『共産党員の転向と天皇制』 三一書房  
 金達寿・金石範 「〈対談〉文学と政治」 『朝日ジャーナル』 1964年10月10日号  
 金達寿 「文学と政治についての感想」 『日本文学』 1954年6月号

## 要 旨

植民地期日本において、朝鮮人は日本のプロレタリア、共産主義者の影響を受け協力した。日本共産党の影響など、戦前戦後の日本の情勢の考察は、在日朝鮮人文学の形成と背景について論じる際に欠かせないものであり、在日朝鮮人文学、とくに金石範の文学を理解するにも不可欠である。それは金石範の大テーマの一つが四・三事件であり、彼がこの事件について深く考えるようになった背景と関わっているからである。金石範は、共産党と組織での体験なしにこの事件にこれほど深く執着できなかったし、これを基盤としていたからこそ、『火山島』（四・三事件をテーマにした作品群）を書き上げることができたと考えられる。

金石範は在日朝鮮人として、共産党及び組織との関わりを繰り返し期待しながら上手く成しとげられなかったことに絶望感、虚無感を感じた。愛国者であれば組織に参加すべきだという当時の雰囲気の中で彼は少しためらいながらも組織に入る。そしてその組織が次第に伏魔殿に変わっていくのを観察しながら、それでも彼はどうかして政治的かかわりを保ち続けようとする。しかし、結局彼は組織を離れることになった。

植民地と戦後の時代状況において祖国への思いを言明せずにいることは許されなかった。とくに金石範のような二世にとっては、政治活動への思いはより複雑なものであったと考えられる。また、祖国への思いが明確にされなくても、それが心の底から湧き出たものであることも否定できない。このような祖国と組織に対する彼の錯綜した思いは作品に鮮明に表れている。

彼は表にはヒロイズムの姿勢を打ち出そうとしながら、実際に行動することはできず、むしろそこから逃げ続けていたが、唯一逃げようとしなかったのは、「ものを書く」ことであった。換言すれば、金石範は体を張って行く「実践」的政治活動からモノを書く「文学」的政治活動へ「転向」したといえるだろう。彼は自身の体に沁み込んだ「政治的なもの」を「文学」を通して表現しようとしたのではないか。

キーワード：在日朝鮮人、金石範、『火山島』、四・三事件、組織、転向

투 고 : 2009. 8. 31

1차 심사 : 2009. 9. 12

2차 심사 : 2009. 9. 26